

王安憶文学作品における上海語研究(1)

—『流逝』(その1)—

吉田陽子

王安憶は1954年南京生まれ、翌年母親と共に上海へ移住し、1970年、安徽省へ下放される。1972年、江蘇徐州地区文工団の楽器演奏者になり、そして、1987年上海作家協会でプロ作家作家として創作活動を開始。王安憶の主な入賞作品は、小説『本次列車終点』は1981年全国短篇小説賞、『流逝』は1981-1982年全国中篇小説賞、『小鮑庄』は1985-1986年全国中篇小説賞、『長恨歌』は第5回茅盾文学長篇小説賞に受賞、『髮廊情話』は2005年魯迅文学短篇小説賞受賞。2004年より復旦大学中国語学部で教授として教鞭を執る¹。

『流逝』²は、『鐘山』(1982年第6期)に収録されている中篇小説である。

そこで本稿は、張愛玲『十八春』(『半生縁』)と『傾城の恋』に続き、王安憶『流逝』に使用されている上海語を紹介していく。

『流逝』は8章によって構成されている。あらすじを簡単に紹介すると次のようになる。

第1章～第6章

物語の舞台は上海であり、時期は文化大革命の真っ最中である。主人公の欧陽端麗は大学を卒業後、甘肅省への統一配属を断ったため、就職がままならず、いまや専業主婦で、夫、三人の子ども及び夫の両親、夫の弟、妹と一つの屋根の下で暮している。文革の嵐の中、義父は資本家であった為、資金の固定利息と給料が凍結され、毎月一人につき12元的生活費だけ支給されて、切り詰めた生活を強いられている。さらに、家の一階は他人に占領されて住まわれている。欧陽端麗は、明日の食費がなくなり、その翌日の光熱費さえも払えなくなる程追い詰められた。そこで、一歳半の男の子のベビー・シッターをしたり、人のセーターを編んだりして、僅かな収入で家計の助けをしていたが、それでも追いつくことができなかった。最後はプライドを捨て、小さな町工場でラジオの部品にワイヤを巻きつけるというパートの仕事を見つけた。欧陽端麗は、時々文革前の裕福な暮らしを思い出すが、しかし、今の暮らしは貧しくても、自分を必要とする家族がいてくれて、人生の苦しみも楽しみも味わえて、それも悪くないと思えるようになった。

第7章、第8章

三年後欧陽端麗は正社員となった。そして、1976年末、文化大革命の終結を迎える時期となる。国の政策により、夫の両親が家宅捜査により没収された資産と家はすべて返された。10年間も凍結された資金の固定利息と未払い給料が返され、封印された部屋は再び使えるようになった。夫

¹ 王安憶「王安憶簡歴」(張新穎、金理 編『王安憶研究資料』上巻所収)天津人民出版社、1996年、1頁

² 本稿が使用したのは、[王安憶著『流逝』(『海上繁華夢』王安憶自選集之一・中篇小説巻所収)作家出版社、1996年1-83頁]のものである。本稿では書籍に収録された作品でも、作品は『』で表記する。

の両親は、政府から返してくれたお金を子どもたちに分配し、嫁の欧陽端麗にも同じような額をあげた。そのため、欧陽端麗は義妹に嫉妬されながらも、文革前と同じように、再びパーマをかけ、良い化粧品を使い、南京路のブティックへ行き、ショッピングを楽しむようになった。彼女は仕事も辞めたため、毎日たっぷり時間はある。しかし、何をしたら良いかは分からなくなる。時は静かに過ぎ去って行き、自分が一体人々に何を残しているのかと考えたり、いや、時は無為に流れてしまったはずはないと彼女はまた思い返したりもした。

次は分析に使用したテキストと分析方法を説明しておく。

1. 使用テキストについて

王安憶著『流逝』（『海上繁華夢』王安憶自選集之一・中篇小説卷所収）作家出版社、1996年1-83頁

2. 下記の「『流逝』について」に関して

① 「原文」の下線部分は、『流逝』に現れる上海語を取り出したものであり、「説明」は、「原文」の日本語訳や説明及び中国語共通語との類似語の表示である。

② 参考資料について

1) ローマ字及び声調の表記法は、『エクスプレス上海語』（榎本英雄／范晓 著、白水社、1996年4月5日第6刷）を参考にしたものである。例えば、

声調Ⅰ声 [平声] zàn (張) 高点から低点まできれ目なく下降させます。

Ⅱ声 [陰去] zān (壯) 中高点から微上昇させます。

Ⅲ声 [陽去] zhán (長) 低点から中高点まで上昇させます。

Ⅳ声 [陰入] zāk (扎) 高点で短く日本語の促音のように声をつめます。

Ⅴ声 [陽入] zhǎk (石) 低点で短く日本語の促音のように声をつめ、終了時には中点近くまで上昇させます。（『エクスプレス上海語』12、13頁）

2) 日本語訳は、『上海語常用同音字典』（宮田一郎 編著、光生館、1988年9月10日初版）等を参考したのである。

3. 連読変調について

上海語の会話は連読変調が生じるものではあるが、本稿ではすべて文字毎に声調を附し、連読表記はしていない。

『流逝』について（第1章 1～9頁）

頁-行	下線の語彙—上海語 ローマ字—上海語の発音	説明 (文章の翻訳)、(共通語)
1頁-3、4行 (以下「1-3、4」と略す)	谁家的后门开了，又重重地碰上 了 <u>司伯灵锁</u> — 司伯灵锁(sì bak lín sū)	(誰かの家の裏門が開くと、ばね錠がまたしっかりとかけられた。) 司伯灵锁:ばね錠

2-13	地上潮漉漉粘搭搭的像刚下过一场细雨。 潮漉漉 (zháolùlù) 粘搭搭 (ni dak dak)	(地面はびっしょりと濡れて、ねっとりしており、まるで小雨が降ったばかりようであった。) 潮漉漉:びっしょりと湿っている。 粘搭搭:ねっとりしている。
2-14、15	一辆黄鱼车横冲直撞地过来了, 人流被劈成两股。 黄鱼车 (hhuán gn 〈Ⅲ声〉cò) 横冲直撞 (hhuán cò zhèk shán)	(一台の四輪車がめちゃくちゃに走り回ってきて、人の流れが二つに分断された。) 黄鱼车:四輪車。 横冲直撞:めちゃくちゃに走り回る。
3-5、6	六十元, 扣除煤气, 水电, 米, 油盐酱醋, 肥皂草纸牙膏等费用, 剩下的钱全作菜金, 也只够每天八毛。 草纸 (cāozǐ)	(60 元のうち、光熱費及び米や油などの調味料、石けん、トイレトペーパーなどにかかる費用を差し引けば、残ったお金を全部食費にしても、毎日 8 毛(80 銭)しか使えないんだ。) 草纸:トイレトペーパー 草纸=〈卫生纸〉
3-8、9	一碗雪里蕻炒肉丝放在饭桌上, 六只小眼睛一眨一眨, 一会儿就把肉丝全啄完了。 雪里蕻 (xik lí hón) 啄完 (zhōk hhéu)	(茶碗一杯の野沢菜漬と肉炒めが食卓に置いてあり、6つの小さな目をぱちぱちさせて、あっという間に細切りした肉を平らげる。) 雪里蕻:野沢菜漬に似た食材。(文革時代、上海の食材市場には漬物の甕が置かれて、量り売りをしていた。) 啄完:平らげる。(結果補語を附加した用法) 啄完=〈吃完〉
3-13~20	她在末尾站上, 一边细细打量肉案上的肉, 经过衡量对比, 看中了一块夹精夹肥的肋条。…… 又有一个人要买那块肋条肉, …… “要这块肋条, 一块钱!” 她怕被人挤出去, 两手抓住油腻腻的案板。 肋条(lèk dhiáo) 油腻腻(yhióe nini)	(彼女は列の末尾に並んで、肉切り台の肉をひと回り見わたして、目測と比較により、赤身と脂身が入っているばら肉が気に入った。… もう一人の客もその塊りのばら肉が欲しかったようだ。… 「このばら肉を下さい! 1 元出します。」彼女は人に列の外へ押し出されるのを恐れて、両手でねばねばしている肉切り台をしっかりと掴んでいた。) 肋条:ばら肉。 油腻腻:ねばねばしている。
3-24	“你这个人真疙瘩, 你不要人家要!” 疙瘩 (gak dak)	(「あなたったら本当にひねくれている。あなたが要らなかつたら、他の人が欲しがっている!」) 疙瘩:ひねくれ者。(上海語では、よく人の性格として表現される。)疙瘩=〈挑剔〉
4-9、10	有一些孩子, 斜背书包, 手捧粢饭或大饼油条, 边吃边走。 粢饭(cì váe)	(カバンを斜めにかけて、手に粢飯や大餅 ³ 、揚げパンを持って、歩きながら食べている何人かの子どもがいる。) 粢飯:もち米で蒸したご飯を四角い形にして、油で上げた食べ物。上海人の朝食の好物である。

³ 小麦粉をねって丸く平たく大きくして、かまどの中の壁側に引っ付けて焼いた食べ物。

4-11	多多很好，没忘了点煤气 <u>烧泡饭</u> 。 烧泡饭(sào pāo váo)	(多多 ⁴ は利巧で、ガスに火をつけて残ったご飯をお粥にすることは忘れていなかった)。 烧泡饭:残ったご飯をお粥風にする。
4-15、16	多多却噘起了嘴，没精打采地 <u>数珍珠似地往嘴里拣饭米粒</u> 。 数珍珠(sūzhēnzi) 拣饭米粒(gǎn fàn mǐ lì k)	(多多は、口を尖らせて、元氣なく、米粒を数えているでもように、いじりながら口に入れていた。)数珍珠:ゆっくりご飯を食べているという様子の表現。 拣饭米粒:ご飯粒をいじる。
4-19	“别忘了给 <u>姆妈</u> 爹爹端一点过去。”文耀说，…… 姆妈(mǔ mā)	(父さん、母さんにも〈お菜を〉少し持って行くように忘れないでね)と文耀 ⁵ は言った。…」 姆妈:母親 姆妈=〈妈妈〉
5-1	“不是我放的。”咪咪赶紧 <u>声明</u> 。 声明(sènmín)	(「私が置いたのではない」と咪咪 ⁶ は急いできっぱりと弁解した。)声明:きっぱりと弁解する。(上海語では、「説明する」「きっぱりと弁解する」のように、子どもでもよく使われている表現。)声明=〈辯明〉
5-3~5	去年年底 <u>划块块</u> 分进中学，每天不知在学什么，纪律倒很严，不许迟到早退，多多这样出身不好的孩子，就更要小心才行。 划块块(huá kuài kuài)	(去年の年末は、地域で区分けして中学校に入学させられているが、毎日何を勉強しているかは分からない。だが、遅刻、早退してはならないと規律は厳しいものであった。多多のような出身の悪い子どもは、より慎重に行動をしなければならない。)划块块:地域で区分けする。划块块=〈分地段〉
5-6、7	端丽嘱咐道：“人家说什么，随他的去，你不要 <u>响</u> ，别回嘴， <u>听到</u> 吗？” 响(xiǎng) 听到(tīng dào)	(端麗は、「人さまが何を言おうかほっといて下さい。相手にしないで、口答えしないで下さい。分かったわね」と言いつけた。)响:声を出す。不要响=〈不要说话〉听到:聞こえる。听到=〈听见〉
5-8	“ <u>晓得</u> 了!”多多下楼了。 晓得(xiǎo de)	(「分かった!」と、多多は下の方へ下りて行った。)晓得:知る;分かる。晓得=〈知道〉
6-5	端丽洗碗，扫地， <u>揩</u> 房间，…… 揩(kāi)	(端麗は、茶碗を洗い、地面を掃き、部屋を拭いていた。)揩:拭く。揩=〈擦〉
6-7、8	“妈妈，”咪咪从窗口扭过来说，“‘ <u>甫志高</u> ’又来 <u>找小娘娘</u> 了。” 小娘娘(xiǎo niàng niàng)	(「ママ」、咪咪は窓口から身を振り向いて、「『甫志高』がまた叔母さんに会いに来たよ」と言った。)

4 欧陽端麗の長男。

5 欧陽端麗の夫。

6 欧陽端麗の末娘。

7 小説『紅岩』の登場人物。(第3回国共内戦を描いた人気小説。甫志高は、主人公江姐を裏切った男である。文革時、出身の悪い男子生徒が、しばしば『甫志高』というあだ名で呼ばれていた。)

		小娘娘:一番下の叔母。 小娘娘=〈小姑娘〉
6-17、18	端丽惶惑地看着它们,不晓得该如何阻止它们继续小下去。 晓得(xiāodek)	(端麗は、恐れながらそれら〈煮込んでいる肉〉を見つめ、どのようにすれば、肉がこれ以上縮まないようにできるかは分からなかった。) 晓得:上記「5-8」に同じ。 不晓得=〈不知道〉
6-21、22	看他那么懒洋洋的邈邈样子,她不晓得他当年和父亲划清界线的革命闯劲上哪儿去了。 邈邈(lak tak) 晓得(xiāodek)	(彼 ⁸ のこんなにも気の進まない様子を見ると、彼女は、当初の義父と一線を引いたような革命的な勇猛心はどこへ消えてしまったのか分からなくなった。) 邈邈:だらしない様子。(上海語では、強調として【邈里邈邈 lak lí lak tak】もよく使われている。) 邈邈=散漫 晓得:上記「5-8」に同じ。 不晓得=〈不知道〉
6-27~7-1	(端丽)对边上神情关注的咪咪解释:“这样,味道才能烧进去。” 烧进去(sàojinqī)	(〈端麗は)隣りで真剣に見ている咪咪に、「このように作れば、味を中までしみこませることができる」と説明した。) 烧进去:料理中、味を中までしみこませて作る。(方向補語を附加した用法。) 烧进去=〈渗透进去〉
7-2	“肯定好吃得一塌糊涂,妈妈。” 咪咪说。 一塌糊涂(yik tà wú dhú)	(「きっと、ほっぺが落ちる位美味しい、ママ。」と咪咪が言った。) 一塌糊涂:めちゃくちゃ;すごく。(上海語の日常会話では、程度の深さを表し、褒め言葉としてもよく使われている。) 一塌糊涂=〈不得了〉
7-11、12	“一点点东西,姆妈,给爹爹尝尝味道。”端丽放下碟子赶紧走了。 姆妈(m< I 声)mā)	(「お母様、僅かばかりのお菜です。お父様に召し上がらせて下さい」と、端麗はお皿を置いてすぐ出て行った。) 姆妈:上記「4-19」に同じ。 姆妈=〈妈妈〉
7-17、18	端丽松了一口气,打开衣柜,想找几件旧衣服,翻一条棉裤。 翻棉裤(faemikù)	(端麗はほっとして、箆笥を開けて、古着を何枚か見つけ、綿入れのズボンを作ろうと思っていた。) 翻棉裤:綿入れのズボンを新しく縫製しなおす。
8-10、11	“瞎三话四。嫂嫂你是最不见老的。不过,那时你真漂亮,我至今还记得你结婚那天的模样。” 瞎三话四(hak sàe hhó sī)	(〈文影 ⁹ は)「よく言うよ。お義姉さん、あなたは最もふけてるようにみえない人だわ。でも、あの時のお義姉さんは本当に綺麗でした。ご結婚の日の様子をいまだに覚えています」と言った。) 瞎三话四:いい加減なことを言う。(上海語では、語気の軽いものである。) 瞎三话四=〈瞎说〉
8-27	“嫂嫂你又瞎三话四!”文影红到	(「お義姉さん、また言いましたね!」と、文影は

8 欧陽端麗の義理の弟を指す。

9 欧陽端麗の義理の妹

	脖子根。 瞎三话四(hak sàe hhó sī)	首まで赤く染めていた。) 瞎三话四：上記「8-10、11」に同じ。 瞎三话四＝〈瞎说〉
9-6、7	“我怎么也不去外地的，在上海吃泡饭萝卜干都比外地吃肉好。” 吃泡饭(qik pāo váe) 萝卜干(láo bhōk gèu)	(「私はどんなことがあっても、地方へは行きません。上海でお粥とお漬物だけの暮らしでも、地方で肉のご馳走を食べるよりもましなので」と言った。) 吃泡饭：お粥(残ったご飯で炊いたお粥風のようなもの)を食べる。 萝卜干：沢あん

【参考資料】

「日本語」

榎本英雄／范晓 著『エクスプレス上海語』白水社、1996年4月5日第6刷

宮田一郎 編著『上海語常用同音字典』光生館、1988年9月10日初版

「中文」

阮恒輝 著『上海話教程』上海辞書出版社、2014年8月

錢乃榮 編著『上海話大詞典』上海辞書出版社、2008年4月第5版

丁迪蒙 著『学説上海話』上海科技文献出版社、2015年1月第2版

【参考文献】

張新穎、金理 編『王安憶研究資料』(上)(下)天津人民出版社、1996年

「王安憶作品」

『海上繁華夢』王安憶自選集之一・中篇小説卷、作家出版社、1996年